～洛西からの一読～

今回のテーマは「クリスマスの奇蹟」

子どものころに読んだ絵本のなかで，大人になってからも忘れられない一冊はありますか？

今回紹介する本は，いつまでも忘れられない絵本の中から**「クリスマスに起こった奇蹟」**のお話を紹介します。

神の道化師

トミー・デ・パオラ／作，ゆあさ ふみえ／訳　ほるぷ出版

曲芸ひとつで身を立て生きていた孤児のジョバンニは，イタリア中でその名を知られるほど人気を博しても欲を持たず，ただ周りの人を喜ばせたいという思いだけで曲芸を披露しながら旅をしていく。そうして月日は流れ，やがて年老いたジョバンニの曲芸に足を止める人はいなくなった。きっぱりと芸をあきらめ故郷に戻ったジョバンニはクリスマスの夜に教会にたどり着く。大勢の人がイエスさまに捧げものをしていたが，捧げるものが何もないジョバンニは，イエスさまの前で自分にできる唯一の曲芸を披露し始めるのだった。

古くからフランスに伝わる民話をもとに描かれた『神の道化師』。この物語とであった子どものころ，絵本の中でくり広げられる道化師ジョバンニの曲芸に心をときめかせ，ジョバンニが息絶える姿に涙を流していた。悲しい話だがくり返し何度も読んだのは，クリスマスの夜に起こる奇蹟が胸に響き，その感動をいつまでも忘れられなかったからだろう。

急行「北極号」

クリス・ヴァン・オールズバーグ／絵と文，
村上 春樹／訳　あすなろ書房

大人ならきっとオールズバーグの絵本にデジャヴを感じるのではないだろうか。サンタクロースを信じていた子どものころ，家の前まで急行「北極号」(ポーラーエクスプレス)が迎えに来て，サンタクロースと小人たちがいる北極点まで連れて行ってくれるとしたら……。

クリスマス・イブの夜，ぼくはベッドの中でサンタのそりの鈴の音が聞こえてくるのを，息をひそめて待っていた。すると，聞こえてきたのは鈴の音ではなく蒸気機関車の音。ぼくは家の前に突然現れた急行「北極号」に乗りこみ北極点まで旅をする。世界のてっぺんにぽつんとあるその町では，クリスマスのおもちゃがすべて作られている。ぼくはサンタクロースからプレゼント第一号として，サンタのそりについている銀の鈴をもらった。手渡された銀の鈴を，ぼくはすぐにローブのポケットにしまった。そして，帰りの「北極号」の中でポケットに手を入れてみると……。

オールズバーグが描く，薄く明るい黄色の光をじっと見ていると，夢の中でそんな体験をしたことがあるように感じてしまうのは私だけだろうか。